

## 二 飛躍への助走―中学校高等学校

### 1 旧校舎の解体から新校舎の建設へ

- 昭和六十二年(二九八七)、跡見花蹊生誕一五〇年記念事業の中核として中高の校舎を全面的に改築することが決定され、基本計画も立てられた。
- 太平洋戦争などの幾多の試練を乗り越え、独特のあたたかみをもち、数えきれないほどの想い出のつまつた旧校舎を惜しむ声は天下に満ちあふれていたが、①校舎の老朽化による危険性の増大、②新時代の教育に対応可能な新施設・設備の必要性、この二点は学園・中高がともに絶対に解決しなければならぬ問題であり、ついにこの事業は足かけ四年にわたるその第一歩を踏み出した。
- まずは旧校舎の解体と新校舎の建設の最中にも平素と変わりなく授業を実施するために、仮設のプレハブ校舎の建設が始まった。ここではその経過のあらましを見ておく。
- |   |                   |
|---|-------------------|
| 昭和六十二年(二九八七)、跡見花蹊生誕一五〇年記念事業の中核として中高の校舎を全面的に改築することが決定され、基本計画も立てられた。  | 昭和六十二年十二月<br>中    |
| 太平洋戦争などの幾多の試練を乗り越え、独特のあたたかみをもち、数えきれないほどの想い出のつまつた旧校舎を惜しむ声は天下に満ちあふれていたが、①校舎の老朽化による危険性の増大、②新時代の教育に対応可能な新施設・設備の必要性、この二点は学園・中高がともに絶対に解決しなければならぬ問題であり、ついにこの事業は足かけ四年にわたるその第一歩を踏み出した。 | 昭和六十二年十二月<br>中    |
| まずは旧校舎の解体と新校舎の建設の最中にも平素と変わりなく授業を実施するために、仮設のプレハブ校舎の建設が始まった。ここではその経過のあらましを見ておく。   | 昭和六十二年十二月<br>中    |
| 昭和六十二年(二九八七)、跡見花蹊生誕一五〇年記念事業の中核として中高の校舎を全面的に改築することが決定され、基本計画も立てられた。  | 昭和六十三年(二九八八)三月十四日 |
| 太平洋戦争などの幾多の試練を乗り越え、独特のあたたかみをもち、数えきれないほどの想い出のつまつた旧校舎を惜しむ声は天下に満ちあふれていたが、①校舎の老朽化による危険性の増大、②新時代の教育に対応可能な新施設・設備の必要性、この二点は学園・中高がともに絶対に解決しなければならぬ問題であり、ついにこの事業は足かけ四年にわたるその第一歩を踏み出した。 | 同、四月十八日           |
| まずは旧校舎の解体と新校舎の建設の最中にも平素と変わりなく授業を実施するために、仮設のプレハブ校舎の建設が始まった。ここではその経過のあらましを見ておく。   | 同、四月十八日           |
| 昭和六十二年(二九八七)、跡見花蹊生誕一五〇年記念事業の中核として中高の校舎を全面的に改築することが決定され、基本計画も立てられた。  | 同、五月十七日           |
| 太平洋戦争などの幾多の試練を乗り越え、独特のあたたかみをもち、数えきれないほどの想い出のつまつた旧校舎を惜しむ声は天下に満ちあふれていたが、①校舎の老朽化による危険性の増大、②新時代の教育に対応可能な新施設・設備の必要性、この二点は学園・中高がともに絶対に解決しなければならぬ問題であり、ついにこの事業は足かけ四年にわたるその第一歩を踏み出した。 | 同、五月十七日           |
| まずは旧校舎の解体と新校舎の建設の最中にも平素と変わりなく授業を実施するために、仮設のプレハブ校舎の建設が始まった。ここではその経過のあらましを見ておく。   | 同、五月十七日           |
| 昭和六十二年(二九八七)、跡見花蹊生誕一五〇年記念事業の中核として中高の校舎を全面的に改築することが決定され、基本計画も立てられた。  | 同、六月六日            |
| 太平洋戦争などの幾多の試練を乗り越え、独特のあたたかみをもち、数えきれないほどの想い出のつまつた旧校舎を惜しむ声は天下に満ちあふれていたが、①校舎の老朽化による危険性の増大、②新時代の教育に対応可能な新施設・設備の必要性、この二点は学園・中高がともに絶対に解決しなければならぬ問題であり、ついにこの事業は足かけ四年にわたるその第一歩を踏み出した。 | 同、六月六日            |
| まずは旧校舎の解体と新校舎の建設の最中にも平素と変わりなく授業を実施するために、仮設のプレハブ校舎の建設が始まった。ここではその経過のあらましを見ておく。   | 同、六月六日            |

同、六月十七日

仮設校舎A・B・C棟完成

同、十八日

仮設校舎への移転作業開始(生徒臨休)

同、十九日

仮設校舎への移転作業終了

同、二十日

仮設校舎にて授業開始

そしていよいよ旧校舎の解体工事が始まった。  
再びその経過のあらましを見ておく。

昭和六十三年六月二十日

本館・高二校舎の渡り廊下の解体開始

同、二十三日

本館内の木造部分の取り壊し開始

仮設校舎から体育館・別館への通路設置開始

同、二十五日

旧視聴覚研究室・保健室の部分取り壊し開始

同、七月四日

本館解体開始

同、十三日

旧和裁室・L1教室を部分解体

同、七月十九日

二階の大部分解体終了

同、二十六日

旧校務部・校長室・庶務室の一部を残し解体

同、八月五日

旧校長室・庶務室のグラウンド側壁面を残し、

校舎の大部分解体

同、六日

新校舎の地鎮祭 地上部分の解体終了

同、二十六日

整地完了

こうしてこの直後から新校舎の建築が開始された。

## 2 竣工した新校舎

平成二年(一九九〇)三月末、念願の新校舎がついに竣工し、同年四月十二日の始業式からは生徒を迎え入れての本格的な使用を開始した。これが現在の校舎である。モダンな中にも清楚でゆつたりとつつ格調高い雰囲気漂い、歴史と伝統あ

る本校の新校舎としてふさわしい趣きを感じさせる。また校舎中央のエレベーター上方に天を突くようにそびえている四角錐しかくすい(最高点地上四メートル)は、池袋のサンシャインからも東京ドームの手前に見ることのできる新校舎のシンボルである。この地上六階・地下二階、総面積一万三三八四平方メートル(旧校舎の約一・五倍)からなる新校舎で、今現在も一七〇〇名余りの中高の生徒が日々勉学に励んでいる。

校舎全体の基本的な構造として、東西に廊下が伸び、その中央にロータリー部分を設け(一階展示ホール、二階アトリウム<sup>\*</sup>、三階以上吹き抜け)、さらにそこから北西に向かつてもう一本の廊下が伸びている。冷暖房完備の上、南向きの校舎は十分な自然光の採取が可能で、校舎内の壁面の色彩が明るい白系統であることも相まって理想的な学習環境を整えている。

一階は教職員が執務するスペースで、東端にある教職員玄関から構内に入ります。校長室、中高事務室、第一〜三応接室、印刷室、放送室、保健室、第一・二教員室、小会議室、講師室、中高会議室、パソコン実習室、第一・二生徒会室、作

法室などがある。

二階には生徒がホームルームとして使用し、また授業を受ける普通教室一室と、その他に図書館や進路指導室などがある。そしてこの階に生徒用昇降口がある。それは一階の教職員玄関の脇から階段を昇った所に設けられている。さらにそこから入つてすぐのスペースが前出のアトリウムで、三階から最上階の六階までが吹き抜けになつていて、自然光を十分に採取し、一七〇〇名余りの生徒の玄関あるいは憩いの場所として十分にふさわしい広さを用意している。

三・四・五階はそれぞれ普通教室一〇室あるいは一室と、三階には美術・工芸科の実習室と英語科のL.L教室、四階には理科の実験室、五階には家庭科の実習室とカウンセラー室などがある。

六階には普通教室一室と、その他に音楽・書道科の実習室がある。

普通教室は学年が上がるに従い下の階を使用するのが通例である。具体的にいえば、一学年六クラス制となつた平成十三年度以降、中学一年は五階東寄り六室、中学二年は五階西寄り三室と四階西寄り三室、中学三年は四階東寄り六室、高校一

\*ローマ時代の住宅建築では中庭を意味する



年は三階東寄り六室、高校二年は三階西寄り三室と二階西寄り三室、高校三年は二階東寄り六室といたった具合である。

なお本校では校内の清掃は生徒が行うべきものという伝統が今も生きている。よって毎日の終礼後、定められた分担に従って生徒自身が清掃している。皆真摯な態度で励行し、築一五年の本校校舎がいまだに清潔感あふれる状態であることの大きな要因である。このことは毎年の中学受験者対象学校説明会でも受験生とその保護者からも称賛を得ている。

### 3 跡見講堂の竣工

新校舎の竣工から一年四ヵ月を経過した平成三年七月、その北に位置する場所に体育館と講堂を兼ねる跡見講堂が竣工した。新校舎とは構内で接続している(北西向き廊下に上下の階段あり)。新校舎と自由に行き来できるところから通常は中高が使用しているが、中高専用の施設というわけではなく、短期大学の入学式・卒業式や学園の後援会の講演会などもここで開催されている。ただ前述のごとく通常は中高の使用頻度が圧倒的に高



い。延面積五一五八平方メートル。

まず大アリーナ(新校舎の中二階に位置している)は、入学式・卒業式はもちろんのこと、始業式・終業式や毎週の全校朝礼など中高の生徒が一堂に会して行うべき諸々の儀式は必ずここで挙行される。さらに各学年や生徒会の集会もそうだが、な

により毎日の体育の授業やクラブ活動(体操部・バスケットボール部・バドミントン部・バレーボール部など)の場所である。その稼働率は非常に高く、いつも生徒たちの活気で満ちており、中高の教育活動には不可欠な施設である。三七メートル×三一メートル。

なお大アリーナ中段部には一周の全長一二〇メートルの屋内用ランニングコースが設けられており、大アリーナや小アリーナを使用する運動部の生徒たちが懸命に走っている姿を見かけることができる。

跡見講堂の地下一階には小アリーナと小講堂が設置されている。小アリーナは日々の中高の体育はもちろん、各学年の集会やクラブ活動(剣道部・卓球部・ダンス部など)に使用されている。二八メートル×一九メートル。小講堂は各学年の集会やPTA総会、文化系クラブ(演劇部・器楽部など)の発表会などに利用されている。三五〇座席。

さらに地下二階には温水プールが設置されている。温水プールは年間を通じて一定の温度を保って常時使用可能で、中高の体育の授業や水泳部のクラブ活動は勿論、女子大学のプール実習にも使



小岩井篤

用されている。二五メートルコース×六。

#### 4 小岩井篤校長の就任

平成四年（一九九二）四月、三月末をもって退任・退職した加藤前校長の後を受け、小岩井篤が第六代校長に就任した。小岩井校長は昭和三十一年（一九五六）に数学科専任教諭として奉職し、以後生徒指導主任・庶務主任・校務部長・主幹などの要職を経て、当職に至る。また長くバドミントン部の顧問を務め、またソフトボール部との関係も深い。

小岩井は温厚・誠実・謙虚な人柄で、他人には優しく接し、逆に自分には厳しく身を処した。私学冬の時代、本校にとつても先の見えない不透明な時代に、一期四年にわたって本校の校長職を、特に最後の一年は病身をおして務め上げた。ここでは本校の生徒会誌『跡見』三八号（平成五年二月発行）に寄稿された「ある本から」を掲げて、退任から半年後の平成八年九月に急逝した小岩井前校長の遺徳を偲びたい。

私が先日読んだ本に次のようなことが書い

てありました。その一部を抜粋しますと、「今日の学校には自我と知識の教育はお願いできません、無我と智慧（知恵）の養いをお願いすることはとてもできません。（中略）この自我と知識から生まれてくるのは不平、不満と権利の主張です。無我と智慧から生み出されてくるのは『あり難いこと』、『おかげさまで』、『勿体ない』、そうして喜んで感謝する心の養いです。どんな豊かなものに恵まれても、喜んで感謝する心の養われぬ人は一生経めぐり回って幸せにめぐり合うことのできない人です。」そして、次のようにも書かれています。

「外から吸収された知識や自我は無我と智慧によつて咀嚼され消化されて、人々の精神力に生れ変わるのです。つまり自我を生かしてくれるのが無我であり、知識を磨いてくれるのが智慧です。この智慧と知識、無我と自我の調和が大切であることを知らねばなりません。」

この本とは奈良西の京にある薬師寺の管長高田好胤先生の書かれた本です。

では、智慧とはどういうことなのかと調べ

## 「ごぎげんよう」について

跡見の皆さんがお使いになっている「ごぎげんよう」というご挨拶は、もと御所で高貴な方達の間で使われていました。朝・昼・晩、いつでもどこでも、人とお会いした時も別れる時にも使うことのできる大変便利なお挨拶でもあります。花蹊先生が御所に出入りされていた機縁で跡見でも使うようになったのです。

私は学生時代、目上の人に「ごぎげんよう」

と言うだけでは失礼ではないのかと直接季子校長先生におたずねしたところ、「ごぎげんよくお越し下さい」とか「ごぎげんよろしゅうございます」というように下に言葉を続けるとかえって品位が下るということでした。

「ごぎげんよう」は皇后さまがお上(天皇)へのご挨拶に申し上げる言葉であり、それは今も変わっておりません最高のご挨拶です。ですから決して乱暴な調子で言ってはなりません。

(板谷春子談)

てみますと、「空など仏教の真理に即して正しく物事を認識し判断する能力。これによって愛憎などの煩惱などを消滅させることができる。事の道理や筋道をわきまえ、正しく判断する心のはたらき。事に当たって適切に判断し処理する能力。」とあります。また、無我については、「無心であること。我意のないこと。」などとあり、仏教の空に通ずると書かれています。

中々難しいことですが、私達は学ぶことに

よって知識を得ることはできません。しかし、知識に頼りすぎて自分勝手な判断だけでは、正しい判断とはいえないということでしょう。我意を無くし、冷静に物事を見る心を持たなければ正しい判断は下せないということかと思えます。そのためには無我の心、智慧を磨くことが大切だと述べられているのではないかと思います。最近、自分勝手な行動や権利ばかり主張する人が目立つことを戒めるものと思います。



平成十六年度海外語学研修  
ア・セントメリーズ校にて  
オーストラリ

花蹊先生も「物事に当たって正しい判断の  
できる人になりなさい。」と教えられたと聞  
いています。花蹊先生の教えも先に述べたこ  
とと同じかと思えます。正しい判断を下すに  
は、幅広い教養、経験、思考力を養ってい  
なければならぬと思います。

また花蹊先生は「思いやりの心を持つよう  
に」とも教えられています。これは不平、不  
満の心からは生まれません。感謝の心から生れ  
ます。花蹊先生はこの思いやりということ  
実践され、生徒達はその心の温かさに感激し  
たといえます。跡見花蹊女子伝の中にも花蹊  
先生について、「寄宿舎に居る者ならば、夜  
中に出て行って起して様子を訊ね、工合が悪  
くば摩つてもやろう、肩を揉んでもやろうと  
云う位の親切な心掛けを持って居られたから、  
此の学校の生徒は少し他の生徒と趣を異にし  
て居るのである。」と角田真平氏は書いてお  
られます。このような花蹊先生の教えは、時  
代が違ってても変わらない大切なものと思いま  
す。

とかく、自分勝手なわがままな考えによる

自己主張や権利の主張の多い此の頃ですが、  
私達も知識と自我だけを持って権利の主張を  
するのではなく、思いやりの心を持って、正  
しい判断のできる人になるよう心掛けたいも  
のと思っています。

## 5 海外語学研修の発足

平成七年度より高校生を対象とした夏期休暇中  
の海外語学研修(当初はロンドン大学夏期語学研  
修と呼称)がスタートした。これは創立一二〇周  
年を記念すると同時に、平成五年度よりすでに大  
学で実施している行事に、全学園の行事を実施せ  
んとする観点から高校も新たに参加することで発  
足した。ただし現地での研修は、無論のことなが  
ら高校生用の特別カリキュラムを編成して実施し  
ている。

初年度は全学年から応募してきた計二三名の生  
徒が参加し、約三週間にわたってロンドン大学の  
ロイヤルホロウェイ校の学寮に合宿しながら研修  
を受けた。生きた英語を学ぶとともに、イギリス  
の文化や習慣に触れ、広い視野に立つての物の見  
方を体得できる絶好の行事である。参加生徒はこ



の機会を存分に生かし、好評を博して初回を無事終了することができた。

その後、この行事は毎年三〇名前後の生徒が参加し、現在まで発展的に継続している。そのような中で形式・研修先には変更が加えられ、平成十年度からは学寮での合宿を廃してホームステイの方式を採用し、平成十三年度からはイギリスのロンドン大学からオーストラリアのブリスベンにあるセント・メリーズ校とプライマリースクールに場所を移した。

なお参加生徒数は前述の通り毎年三〇名前後だが、募集開始時の希望人数はそれよりもはるかに多い。希望者は明確な動機を持っているのもしろんのこと、何度も行われる事前のミーティングには必ず参加し、難易度の高い試験をパスしなければならぬなど、厳しい選抜の上でようやく参加資格を得ている。

## 6 目黒信夫校長の就任

平成八年（一九九六）四月、三月末をもって退任・退職した小岩井前校長の後を受け、目黒信夫が第七代校長に就任した。目黒校長は昭和三十七年に

理科専任教諭（生物）として奉職し、以後、生徒指導主任・校務部長などの要職を歴任し、平成七年四月から一年間主事の重職を努めた後、当職に至る。また長く剣道部顧問を務めた。

目黒は剛毅で決断力に富み、困難な舵取りを要求されるなかで教職員を先導しながら本校の校長職を一期四年にわたって務め上げた。退任後も東京都私立中学校高等学校協会の東京私学教育研究所に勤務し、私学の発展に尽力している。

校長在任中、目黒は全校朝礼やその他の講話で、理科、特に専門の生物学から題材をとることが多く、非常に興味深かった。ここでは本校の生徒会誌『跡見』四四号（平成十一年三月発行）に寄稿した「わ」の「こころ」を紹介したい。

生徒会が目標として掲げた「わ」を大切にしたい。また、生徒一人ひとりが自分のこころの中の「わ」を見つめて欲しいと思います。総務局では、「平和の」話し合いの「話」みんなの輪の「輪」話題の「話」分かうとする気持ちの「分」驚きの「わ」を大切に学園生活を送ろう」と掲げたスローガンである

とじています。皆さんそれぞれが、跡見生として、クラスの中で、仲間うちでまた、家族の一員として、互いを思う「わ」があることでしょう。大きな大きな、深い深い言葉ではないでしょうか。

皆さんにとつて、こころにとめておきたい「わ」はどれでしょうか。それぞれのこころの内をまとめてみて下さい。互いの「わ」をつなぎこころを一つにし、生徒会としてのまとまりと一体感から生まれた「わ」を大切にしたい学園生活が、皆さんが学ぶ跡見を發展させ、家庭に在つては互いの絆を強いものとし、友人を支え合う力となることでしょう。

「和」のこころを大切にしたいと思います。歴史で習つた聖徳太子の十七条憲法の「和を以て貴しとなす」は、生徒会が掲げた平和の「和」に一致します。皆で平和を望むこころを強くアピールしていきたいものです。また、このスローガンを見たとき、自分が高校生に戻つたような懐かしさを感じました。それは、孔子の「君子和而不同、小人同而不和（君子は和して同せず、小人は同して和せず）」の

教えが思い出されたからです。

#### 《中略》

「君子和而不同、小人同而不和」とは、「君子は私心がないから、道理に順つて和同しようが、不合理な付和雷同はしない。小人は私利私欲があるために、利を見ては雷同し易く、条理に従つて和同することがない」ということです。一言でいえば、「和而不同」は、付和雷同して浮かれることなく、真の協調性を持つた人間関係でありたいということになります。

生徒会が求める「わ」に加え、「和而不同」がこころにとめおくことが出来る「わ」の一つとなるよう望み紹介してみました。

多くの動物と比べ、運動力・体力など動物的能力の劣る「ヒト」が万物の霊長として自然界に君臨できたのは、個々の知的能力もさることながら、共同で事に当たる社会性を持つたためと考えられます。私達は、祖先のこの偉大な能力の恩恵を受け継ぎ健康で文化的な日々を送っていますが、それに慣れすぎ個々の欲求や満足を求めるあまり、社会の秩

序を維持しようとするところを見失うことがあります。時には「和而不同」の精神を思い出し、互いに高め合っていきたいものです。

## 7 パソコン実習室

中高では、新校舎一階北西向き廊下南側(コンピュータ室と会議室の間)にパソコン実習室を設け、一クラスの人数に完全に対応可能なパソコン五〇台と必要な周辺機器を設置した。当時一般企業や大学ではパソコンなど情報処理機器端末の普及がめざましく、本校でも時代の要請に対応してパソコンを授業に取り入れる試みがなされるに至った。

特に数学科や理科などの理科系の教科・科目での活用が期待され、実際に現在に至るまで頻繁に利用されている。幸い本校では理科系はもちろんのこと、文科系の教科・科目の教員の中にもパソコンに練達した者が多く、寄せられる期待に当初から十分に応え得る体制を整えることができた。

また中高では水曜日一時限目に道徳・特別活動の時間を設定し、中学生は自然教室の準備や作法

などの時間としているが、中学一年では情報処理の時間としても当室を活用し、パソコン初心者でも使用方法の基礎を十分に学ぶことができる。

後述するように、平成十五年度には文部科学省による高校の学習指導要領が改訂され、新教科「情報」(A・B・Cの三科目から一科目選択/標準単位はいずれも二単位)が必修となった。これに対応して本校でもインターネットの利用や問題点について学ぶ「情報C」を履修し、当室の使用頻度は一層高まり、その存在意義は一段と重要となった。

なお情報処理機器の驚異的な進歩・発展に即応し、当室のパソコンは平成八年度と十五年度の二度にわたって周辺機器を含めて一新した。さらに十六年度には三階L教室の機器交換に伴い、情報の授業にも対応可能なものを導入した結果、中高におけるパソコン実習室は事実上二室となった。

## 8 生徒の活動(昭和六十一年度以降)

昭和六十一年度

織維工芸部 日本手工芸文化協会主催第四十

五回手工芸美術展

文部大臣奨励賞(中学合作)

昭和六十二年度

器楽部 第六回リコーダーコンクール関東大会

高校 重奏の部 優良賞

合奏の部 優良賞

中学 合奏の部 優良賞・努力賞

繊維工芸部 第四十六回手工芸美術展

文部大臣奨励賞(中学合作)

昭和六十三年度

繊維工芸部 第四十七回手工芸美術展

文部大臣奨励賞(中学合作)

平成元年度

器楽部 第八回リコーダーコンクール関東大会

高校 重奏の部 最優秀賞(高二)

矢田敦子・松本睦・山下古都・

藤本恭子)

合奏の部 優秀賞(高一 六

名)

中学 重奏の部 優秀賞(中三 三

名)

合奏の部 優秀賞(中一〜三

二八名)

第十八回リコーダーコンクール

金賞(中二 日比麻祐子・水上佐和

子・大熊理恵)

繊維工芸部 第四十八回手工芸美術展

日本手工芸文化協会会長賞(中

学合作)

平成二年度

器楽部 第九回リコーダーコンクール関東大

会

高校 重奏の部 最優秀賞

平成三年度

繊維工芸部 第五十回手工芸美術展

日本手工芸文化協会会長賞(中

学合作)

平成四年度

繊維工芸部 第五十一回手工芸美術展

文部大臣奨励賞(中学合作)

平成五年度

繊維工芸部 第五十二回手工芸美術展

文部大臣奨励賞(中学合作・日

本刺繍)

平成六年度

織維工芸部 第五十三回手工芸美術展

日本手工芸文化協会会長賞(中

高合作・日本刺繍)

器楽部(リコーダー班)

第二十一回リコーダーコンクール関

東大会

中学 最優秀賞(中二 久保田三絵・

大河真裕美・内田智里・勝田恵)

高校 優秀賞(高二 森村佳乃子・

薄井さやか・梅田伸枝)

平成八年度

織維工芸部 第五十五回手工芸美術展

日本手工芸文化協会会長賞(中

高合作)

グラフィックス部 第二十九回私立中学高等

学校生徒写真・美術展

特選(高二 竹村慶子)

平成十年度

織維工芸部 第五十七回手工芸美術展

文部大臣奨励賞(中高合作)

織維工芸部 第六十一回手工芸美術展

日本手工芸文化協会委員長賞

平成十一年度

織維工芸部 第五十八回手工芸美術展

文部大臣奨励賞(中高合作)

第三回日本刺繍公募作品展

(中学合作) 優秀賞(中学合作)

平成十三年度

洋画部 第五十一回毎日新聞社・日本学

生油絵会主催学展

器楽部(吹奏楽班)

入賞(高二 小菅久美子)

第四十三回東京都高等学校吹奏楽コ

平成十四年度

器楽部(吹奏楽班)

金賞(高校選抜メンバー)

第四十二回東京都高等学校吹奏楽コ

織維工芸部 第六十二回手工芸美術展



川島宏

文部科学大臣奨励賞(中学合作)

平成十六年度

器楽部(吹奏楽班)

第四十四回東京都高等学校コン

クール金賞

繊維工芸部 第六十三回手工芸美術展

文部科学大臣奨励賞(中学合作)

洋画部 第十五回東京都読後感想画コン

クール

優良賞(高二 中山彩香)

## 9 川島宏校長の就任

平成十二年(二〇〇〇)四月、三月末をもって退任・退職した目黒前校長の後を受け、川島宏が第八代校長に就任した。川島校長は昭和四十二年に英語科専任教諭として奉職し、生徒指導主任の要職を計八年務めるなどして、当職に至る。また長く英語部顧問を務めた。

川島は誠実で思慮深く、多くの意見に耳を傾けながら、転換期にある多難な本校の校長職を一期四年にわたって務め上げた。ここでは平成十五年七月十九日発行の『学校だより』(二五号)の「校

長室から」より、川島が跡見生に込めた期待とそれを実現するために実践してきた教育方針を紹介する。

今、大きな時代の変革の中で皆さんに求められていることは、混迷した社会をたくましく主体的に生きていくのに必要な、自ら考え学ぶ力と自分の生き方を自ら考え判断する自立した精神です。異文化を理解し尊重するとともに、日本人としてのアイデンティティを持ち、グローバルな視点から自分を見つめ、社会や世界を考える力をもつことです。そして、若者らしい知的冒険心を持ち、夢の実現に向けて努力し続けることです。

また、個性を磨き社会性を培う部活に積極的に参加し、共に語り悩み、共に協力し創造する喜びを体験し、その過程で学ぶ好きな人間関係を築く能力を身につけることも大切です。

更に、跡見の良き伝統を受け継ぐとともに、新たな校風と跡見文化の創造を目指す生徒会活動に参加し、自主性、リーダーシップやボ



ランティア精神を培い、世の一隅を照らす人間となる資質を磨いて欲しいと思います。私たちはこのような視点に立って、生徒一人ひとりを大切にし、個性と可能性を生き生きと伸ばす、心の通った人間教育を実践し、上品で聡明な、品格ある女性に育つよう努力

しています。

特に、自分と違う個性や考え方を認め尊重し、共に助け合いながら学ぶ喜びと生きる感動を分かち合うことを重視します。人と人との触れ合いを大切にし、温かい友情と信頼関係から生れる、楽しい学園生活、楽しい思い出は生徒の可能性を拓く生きるエネルギーとなるものと考えます。

## 10 新たな行事

平成十四年度より中高ではそれぞれで新しい宿泊行事を実施している。中学校では中三の九月に修学旅行(二泊三日)、高等学校では高一の四月にオリエンテーション(二泊三日)、さらに高二の九月に研修旅行(三泊四日)に出かけている。

中三修学旅行では「広島を訪れて原爆の遺跡・遺物・記念碑などを見、また被爆者の体験談を聞いたり、読んだりして、『戦争被害』や『文明災害』について知り、考え、平和の実現を目指してゆく手がかりにする」ことを目的にしている。生徒は事前に調べ学習を通じて原爆投下について深く理解し、実施にあたって事実・本物に触れ、人類最

大のテーマ、「戦争と平和」について思いを新たにしている。

高一オリエンテーションでは将来の進路を考えることを目的にしている。高等学校に進学して気持も新たな四月早々に、新しいクラスメートとともに北軽井沢研修所で過ごし、職業の研究発表・進路適性に関するワーク・社会人や大学生などの本校卒業生の講演などを通して各人が高等学校卒業以後の進路をじっくり検討し、合わせて自分を見つめなおす機会を設けた。初めて自分の将来について真剣に考え、有意義な時間を過ごせたという感想を述べる生徒も多く、指導教員もこの行事後の生徒の成長ぶりに驚いている。

高二研修旅行は「古都(京都・奈良)を訪れ、古寺や古仏を拝観し、古代人の心を思い優れた日本文化を学ぶ」ことを目的にしている。企画段階から生徒による研修旅行委員会が主体的に企画し、実施にあたっては生徒は自主的に課題を設定し、その解決のためのグループ別行動に最も重きを置いている。また友と昼夜を分かたず語り合える中高最後の宿泊行事であり、一生を通じての思い出づくりにも一役買っている。

なお中三修学旅行の実施に伴い、中三北軽井沢自然教室は廃止された。

## II 新たなカリキュラム

平成十四年(二〇〇二)四月、文部科学省による中学校の学習指導要領の大幅な改訂に際して本校でも週五日制を導入し(高校も週五日制を導入)、併せて新しいカリキュラムを作成・実施した。総単位数は従来の三四から四減じて三〇に、週当たりの授業総時間数も同様に一日六時間が月曜日から金曜日までの五日間で計三〇時間となった。

主な特色としては①国際化時代の本格的到来を背景にした外国語(英語)教育の充実、②単位数・授業数を減じられた諸教科・科目の教授内容の一層の精選、③外国文化の理解と芸術鑑賞力・表現力の涵養を目的とした総合的学習の時間の導入、などである。

週五日制・授業時間数減に関しては、その導入以前から全国的な議論が巻き起こり、学力低下をさらに助長するのではとの憂慮の声も大きかったが、特に授業時間数を減じられる教科・科目では事前に教授内容を入念に再検討し、十分な対策を

中学3年生 [計34]	中学2年生 [計34]	中学1年生 [計34]
国語 5	国語 5	国語 5
社会 3	社会 4	社会 4
数学 5	数学 5	数学 4
理科 4	理科 4	理科 4
音楽 1	音楽 2	音楽 2
美術 2	美術 1	美術 2
保健体育 3	保健体育 3	保健体育 3
家庭 2	家庭 2	家庭 2
英語 5 (習熟度別 A/B/C)	英語 5 (習熟度別 A/B)	英語 5 (習熟度別 A/B)
英会話 1	英会話 1	英会話 1
道徳(習字) 1	道徳(習字) 1	道徳(習字) 1
特別活動(作法を含む) 1	特別活動(作法を含む) 1	特別活動(作法を含む) 1
※道徳では習字「跡見流」を学びます。 ※英会話週1時間と自然教室(広島への 修学旅行)を総合学習に充てています。	※道徳では習字「跡見流」を学びます。 ※英会話週1時間と自然教室(奥日光で の林間行事)を総合学習に充てています。	※道徳では習字「跡見流」を学びます。 ※英会話週1時間と自然教室(編原での 臨海行事)を総合学習に充てています。

講じた。また保護者が懸念していた土曜日も本校  
専任教諭・非常勤講師と大手予備校河合塾の講師  
による土曜講座の開講で対処しており、好評を博  
している(学校六日制・授業五日制)。



現在の授業風景(平成十六年度)

高校3年生 [計30~34]				高校2年生 [計34]		高校1年生 [計34]	
現代文				現代文		国語総合	
体育				政経		世界史A	
リーディング (習熟度別 A/B/C)				体育		日本史A	
倫理				保健		数学Ⅰ+数学A (習熟度別 A/B)	
HR				芸術Ⅱ		数学Ⅰ+数学A (習熟度別 A/B)	
続日本史B	国語演習Ⅱ (小論文を含む)	理科演習	英語Ⅱ (習熟度別 A/B/C)		理科総合A+化学Ⅰ		
続世界史B (演習を含む)	続政経 続地理B	数学演習C	HR		理科総合A+化学Ⅰ		
古典講読	古典B	数学Ⅲ+数学C	数学Ⅱ	HR	体育		
		物理Ⅱ 生物Ⅱ	生物Ⅰ	数学Ⅱ+数学B	芸術Ⅰ		
芸術Ⅲ		数学演習A (数ⅠA)	地理B	化学Ⅱ	家庭基礎		
国語演習Ⅱ(小論文を含む)	被服製作	数学演習B (数ⅡB)	日本史B 世界史B		情報C		
フードデザイン	OCB	理科演習			英語Ⅰ (習熟度別 A/B/C)		
英語演習Ⅰ 英語演習Ⅱ 英語演習Ⅲ		物理Ⅰ 生物Ⅰ	古典A	物理Ⅰ 生物Ⅰ			
国語演習Ⅱ(小論文を含む)	倫理演習		英語演習Ⅰ 英語演習Ⅱ 英語演習Ⅲ		HR		
英作文 日本史演習① 世界史演習①			OCA 数学B 国語演習Ⅰ(古典)		総合学習(進路指導)		
日本史演習② 世界史演習②			総合学習(研修旅行)				

※横に並んでいる枠はいずれかの枠を選び、その枠内の科目の中からひとつを選んで履修します。 1目盛：1単位  
 ※□は自由選択です。必ずしも選択する必要はありません。  
 ※高校1年は進路指導、高校2年は日本文化(京都・奈良への研修旅行)を総合学習に充てています。

続いて翌平成十五年四月からは高校でも新しいカリキュラムが実施された。

主な特色としては①外部受験を志向する生徒の急増、さらにはその要望に答え、高校二年終了時までにはほとんどの教科・科目で受験に必要な基礎学力を十分身につける、②高校三年に設定した多数の演習科目の履修により応用力をしっかりと養成する、③生徒の自主性を重んじ、必修科目を可能な限り抑え、選択科目を高校一年からふんだんに設定する(高校二・三年では履修単位の過半数が選択科目)などである。

言うまでもなく最近の女性の社会的進出は顕著である。これに伴い、本校でもかつては文学部など人文科学系の大学・短大への進学者が圧倒的に多かったが、近年では法学部・経済学部など社会科学系大学・学部への進学者の増加が目立ち、さらに理系大学・学部をめざす生徒数も一〇〇名に迫ろうとし、男子校の志望傾向に近づきつつある。このような状況を踏まえた上で、一大改革に、生徒や保護者の支持はもちろんのこと、社会的にも高い評価を得ている。

そしてさらに平成十七年(二〇〇五)四月からは

本校に寄せられる社会的期待に応え、週六日制をあらためて採用した。総単位数と授業総時間数はともに三四である。中高ともにカリキュラムをさらに練り直し、「中高生として身につけて欲しい学習内容」と「受験の準備・対策」において絶妙にバランスのとれたものができたと自負している。本校としては、社会の変化を見据えて、カリキュラムを弾力的に運用し、さらには迅速に改訂を断行できるよう、これからも恒常的に準備・研究を推進することになる。

## 12 中学入試の変遷(平成以降)

毎年二月初頭に実施している本校の中学入試は、平成初年まで長く入試回数を一回、実施日を二月一日、実施科目を国語と算数の二科(各一〇〇点の計二〇〇点/各五〇分)と面接、募集定員を二七〇名としてきた。だが時代や本校を含めた私立の置かれた状況は大きく急速に変化し、それに迅速に対応するためフレキシブルに入試制度を変更している。ここではそれを列挙しておく。

平成二年度 定員を増やして三〇〇名とする。

平成四年度 科目を増やして国語・算数・理科・社会の四科(各一〇〇点の計四〇〇点)とする。

平成五年度 回数を増やして二回とし、定員を一回目(二月一日)は二七〇名、二回目(二月三日)を三〇名とする。

平成六年度 定員の配分を変更し、一回目は二六〇名、二回目は四〇名とする。

平成七年度 定員の配分を変更し、一回目は二二〇名、二回目は八〇名とする。さらに科目を減じて国語・算数の二科(各一〇〇点の計二〇〇点)とする。

平成八年度 定員を減じて二七〇名とし、さらに定員の配分も変更して、一回目は二〇〇名、二回目は七〇名とする。

平成十一年度 帰国生特別入試(対象は父母の勤務に伴い海外在住期間が二年以上で、帰国後二年以内の者など)を開始する。回数を一回、実施日を一月中旬、科目を国語と算数の二科(各一〇〇点の計二〇〇点)と作文(日本語)・面接、定員を若干名とする。

平成十四年度 回数を増やして三回とし、定員の配分も変更して、一回目(二月一日)は一八〇名、



平井毅

二回目(二月三日)は六〇名、三回目(二月五日)は三〇名とする。

平成十五年度 二回目と三回目で科目を二科と四科(国語一〇〇点・算数一〇〇点・理科五〇点・社会五〇点/理科と社会は同一時間枠の五〇分の選択とする。

平成十六年度 科目を一回目も二科と四科の選択とする。

平成十七年度 定員の配分を変更し、一回目は一四〇名、二回目は九〇名、三回目は四〇名とする。

平成十八年度 科目を一回目のみ二科と四科の選択とし、二・三回目は四科とする。さらに定員の配分を変更し、一回目は一三〇名、二回目は一〇〇名、三回目は四〇名とする。

### 13 平井毅校長の就任

平成十六年(二〇〇四)四月、三月末をもって退任した川島前校長の後を受け、平井毅が第九代目校長に就任した。創立二三〇周年を迎える本年は就任二年目に当たる。平井校長は昭和三十九年(一九六四)に保健体育科専任教諭として奉職し、以

後保健主事・生徒指導主任・校務部長などの要職を経て、当職に至る。また長くバスケットボール部顧問を務め、特に昭和四十年には全国高等学校総合体育大会でベスト8に導くなど、その卓越した指導力で同部の全盛期を現出した。

さらに校外でも東京都や全国の高体連バスケットボール部の常任委員や副部長などの要職を歴任して高校バスケットボール界の発展に尽力するばかりか、東京都や関東のバスケットボール協会の理事長も歴任し、今現在も日本バスケットボール界になくはない存在である。

平井は重厚にして懐深く、冷静沈着、私学が置かれた未曾有の危機のなかで教職員の支持を背景に、本校のますますの発展に全精力を傾けている。具体的には、学祖跡見花蹊の教育理念ともいえる、知識・技術にかたよることなく調和のとれた人間性の育成をめざす「全人教育」を推進し、一方、生徒・保護者のニーズに応えるべく、多岐にわたる進路へ対応できる学力の向上を図るという高い目標を掲げ、日夜粉骨碎身、全教職員の先頭に立つてそれに向かって邁進まいしんしている。